

表現の選択とコミュニケーション

山 本 英 一

(関西大学)

はじめに

私たちは無意識にやっているようだが、さまざまな場面で、どのような表現を使うかは、場面（文脈）の中で話し手と聞き手がどのような関係にあるのか、そしてメッセージを通して何を伝えようとしているのかが重要な決め手になる。本シンポジウムのパネリストのテーマでもある、談話に現れた人をどの代名詞で指示するのか、あるいは誰もが知っている諺を使うことに何の意味があるのかもまた、場面（文脈）や会話（談話）の参加者の関係、そして話し手の発話の意図が大きく関係している。本稿では、新たな意味を伝えることに関心を寄せがちな言語学（コミュニケーション論）に対して、以前に聞いたことがある、つまり話し手の聞き手の共有情報とも言えるメッセージを繰り返すことの意味・役割について、語用論の立場から論じてみたい。

多ければ多いほど良い

私たちは、日常のコミュニケーションがもたらす量的な側面に目を向けがちである。たとえば、Chomsky が提唱する生成文法は、有限個（finite）の語彙から無限の（infinite）文字列、つまり文が生成される脳内メカニズムを解明しようという企てが出发点であった。あるいは、語用論の一派、関連性の理論に現れる例文でも、発話から引き出される情報の無限性に注目する事例がある。

(1) Peter: Is George a good sailor?

Mary: All the English are good sailors. (Wilson & Sperber 1994:98)

「ジョージは船酔いをしないか？」という問いに対して、「はい（船酔いはしない）」とは言わず、「イギリス人は誰も船酔いをしない」という表現を使う背景には、「ジョージはイギリス人である」という Peter と Mary の共有情報が仲介となって、（ゆえに）「ジョージも船酔いしない」という結論を、聞き手に導き出させたいという話し手の意図がある。しかも、推論プロセスが起動することによって、（イギリス人は誰も船酔いをしないということから）「イギリスは優秀な海軍を擁するのだろう」とか、「イギリスには誇るべきものがたくさんあるのだろう」とか、さまざまな連想までも惹起したいとの思いがあると考えられる。このさまざまな連想は、量を限定することができないほどの推意群（an indefinite array of implicatures）と称せられ、「はい」という単純な発話からは到底得られない、無数の情報群の存在が、この発話の存在意義だと考える。この説明の仕方の是非はともかく、

ここにも理論の無限志向が垣間見られる。情報量は「多ければ多いほど良い」という発想である。

繰り返しの効用

一方で、コミュニケーションには話し手と聞き手がすでに知っている表現を繰り返すこともある。

(2) Cathy: *If you've seen one, you've seen them all.*

Don: Thank you.

(Later in a different situation)

Don: *If you've seen one, you've seen them all.*

Cathy: I did say some awful thing that night, didn't I? (*Singin' in the Rain*)

時代は無声映画からトーキーへと変わろうとしている。Donは無声映画のスターだが、Cathyは駆け出しの女優。偶然に出会ったDonの横柄さに、Cathyは「(無声映画なんて)一本見たら、それでたくさんよ」と辛辣な言葉を浴びせる。その後、二人は恋仲に陥るのだが、Donが主演の初トーキーは共演する女優の悪声のためにお蔵入りの危機に瀕する。慰めるCathyにDonが「(ボクの映画なんか)一本見たら、それでたくさんさ」と自嘲気味に言い、それに対してCathyは「あの晩は、ひどいことを言ってしまったわね」と詫びる。

字面上は単なる繰り返しなので、まったく意味の付加はない発話とは言え、場面を共有するDonとCathyにとっては、そして映画のワンシーンを知っている観客にとっても、発話の意図を推論するプロセスを経て、これほど効果的に「侮辱」や「自虐」の気持ちが伝わる発話はないのである。

このように単に同じ表現を繰り返す発話をMention(言及)と呼び、新たに意味を付加しようとする発話Use(使用)とは異なるものとして考えることがある(Sperber & Wilson 1981:303)。

目配せのコミュニケーション

映画にもなったウンベルト・エーコの小説『薔薇の名前』は、次の言葉から始まる。

(3) Naturally, A Manuscript ((この小説は)手記だ、当然のことながら)

なぜ「当然のこと」なのか、おそらく多くの読者にはわからない。ところが、19世紀イタリアの小説家アレッシンドロ・マンゾーニの物語「いいなずけ」の冒頭に、その典拠が17世紀の「手記である」と述べられていて、そのことに気づいた読者には「当然のこと」だとわかる。つまり、“A Manuscript”を(通常の)「使用」としてではなく、「言及」

として理解できる読者（聞き手）との間で、意図されたコミュニケーションが成り立つのである。一方、その意図に気づかない読者、すなわち「手記である」を「使用」の例として理解する多くの聞き手もまた、不可解な印象を拭えないままではあるが、談話に参加し続けることが可能なのである。エーコは、これを「目配せ」と呼び、それに気づいた読者（聞き手）と語り手（話し手）の間には「共謀関係」が成り立ったと考える（Eco 2011:31）。

コミュニケーションにおける「共感」の重要性

要するに、聞き覚えのある表現を話し手が繰り返す、つまり「あなたにはわかるでしょう？」という「目配せ」を送ることにより、それを受け止めた聞き手が「私にはわかったよ！」とほくそ笑む関係のことである。「共謀関係」とは物騒な表現なので、ここでは「共感関係」と読み替えておこう。

「新しい」意味を生み出すわけではないけれど、お互いに聞き覚えのある表現を使うことで、いわば両者の間に「共感関係」が結ばれるのである。同様に諺とは、誰にでも聞き覚えのある表現であって、それが話し手と聞き手を取り巻く状況とピタリ符合したときに、両者は「共感関係」で結ばれる。たとえば、取り返しのつかない失敗をしたことが明白な状況で、It's no use crying over spilt milk（覆水盆に返らず）と言え、話し手と聞き手の双方が心の中で頷き、そこに「共感関係」が生まれる。また代名詞の選択でも同様である。Nature has come through again--she always does のように、Nature を It ではなく、She で指示することにより、女性のイメージが喚起され、それが聞き手の抱くイメージと合致したとき、話し手と聞き手が「共感関係」を結ぶことになる。

このように、コミュニケーションとは、新しい意味を紡ぎ出すことだけが目的（＝多ければ多いほど良い）ではなくて、既知の表現を繰り返すことにより、話し手と聞き手が互いに共感しあい、良好な関係を築く手段であることも忘れてはなるまい。このあたりの詳細は、山本（2023）を参照されたい。

参考文献

- 山本英一（2023）. 謎解きとコミュニケーション～語用論から西欧の知を考える～, 大阪：関西大学出版部.
- Eco, U. (2011). *Confessions of a Young Novelist*, Cambridge, Mass: Cambridge University Press.
- Sperber, D. and D, Wilson (1981). Irony and the use-mention distinction. In Coles (ed.) (1981). *Radical Pragmatics*, New York: Academic Press. pp. 295-318.
- Wilson, D. and D, Sperber (1994). Outline of Relevance Theory. In *Links and Letters 1*, pp. 85-106.